

同人作品

吾亦紅 秋山義仁

北国の秋の夕暮落ちる空あかね色から赤がね色へと移る

風が行く木の葉ふるわせおどらせて烏ついでむ柿の実落ちた

てんてんと人棲んだ跡の散らばる更地ここは玄関あそこは水場

赤トンボ頭に止まるさあ帰ろう人住む町へバス来る町へ

いつまでも慣れぬ啼き声ソバ畑もキジが二羽空は^{いわし}鰯雲

この町の夜が何故かなつかしい店裏の横町のネオンを照らす月

横町のつき当りの北向き二階三畳間が僕等の城だった

さよならは僕から言ったのに君は涙一筋ただ待っています

滅びに向かう神無月うれいたたえた君の横顔吾亦紅

夕暮に帰って来たのね待ってたのでもあなたは帰るここには棲まぬと

いのち短かし 石邊綾子

後まわしにしてきたものに追われつつ師走三日の普遍の流れ

手放した物はいつしか忘却と云うてさむざむ靴下を履く

三年も前のことなら忘れてもよいと思えば時効はいらぬ

我が家から鳥が隣へ飛び移りついばんでいる芝生が青い

たつ年の図柄を選ぶしばらくはわが干支は来ぬという年もがな

永遠の乙女はいない三低を求める暇に恋せよ乙女

心と身体 井上省吾

我も又野草のように元気よく日光あびて体動かす

ヨイシヨと気合を入れて椅子に乗る若い時には掛声いらぬ

足痛み簡易トイレをそばに置きメガネや杖も枕元置く

それなりに変化していく我が体気持ち若いがゆうこときかず

暑さゆえ身体休めて外に出ず庭木伸び過ぎなぜか気になる

朝早く涼しい外気部屋の中誘い込みつつ体動かす

のびのびと背高を伸ばす草木を見ては剪定せねば気になる

どう過す暑さ厳しいこの夏を水分とって体冷して

おひさまが朝早くから顔を出しさあ頑張れと気合いを入れる

乗ってみた体重計数値みる少しやせたか暑さのせいか

サルスベリ花が満開咲いている暑さの残る夏の終りに

庭木にも涼しさ求め剪定し風通し良く陽当りもよし

剪定をした後に出た枝集め細かく切って畑のこやし
陽の光朝から強く輝いて涼しい内にさあ頑張るぞ
さあやるぞ日陰探して草を取る流れる汗が滴り落ちる
雨降らず乾いた土に水撒をホース引張りあちこち動く
曇り空暑さ残るがホットする日照続きのほんのひととき

冬支度 甲村雅俊

飼ひ猫の爪切りをして冬仕度一つ一つを大事になせる
お互ひに恐ろしきゆゑ悲しくも熊は我らに仕留められたり
呑川は水清らかに流れたり黄色秋桜の群れ咲く川辺
秋の日は清浄光明並びなし時間ループに囚はれながら

ロフトベッド

山善の宮付きロフトベッドとふパイプベッドを買ひにけるかも
部屋内の空間さらに広がれば快適なるとロフトベッドは
鉄製のなんとも重きロフトベッドを配送人は運びくれたり
騒がしき音立てながらロフトベッドを四時間かけて組立て終る
ロフトベッドに横になり手を伸ばしたり天井に手がつく狭すぎる
不用意に起きあがればわが額からああ天井にぶつかる狭さ
いまさらに返品できず部屋内に鎮座ましますロフトベッドは

棲家

居心地のよくなるアパート暮らしなり住人は若きと無職老人
夢やぶれいづこへ還る 鼻歌に終の棲家はこの部屋でよし
本当は人里離れ死ぬるまでぼつんと一軒家で暮らしたし
音がして手に取るやうにわかるなり階下の人のその生活は

それぞれに人生があり苦しきか人に生まれしことを哀れむ
次の世は植物などに生まれたし動物の生は辛すぎるゆゑ
生存は悪 ほんたうは誰もみな生きてをらざることこそ善か

街は十二月

休日は呑川沿ひに自転車をこころの中は泣きながら漕ぐ
樋といふ字を忘れれば樋口さんとひぐちさんと読まない苗字
秋の花をはりて街は十二月あまた電飾かがやきはじむ
外国の戦争つらく次々と子ども亡くなり悲しかりけり
満月は天心にありわが暗きこころの地図を隈なく照らす
決まりごと日入りて多く食らはずと白樂天の養生法は

パリホテル

氷室敬子

古きわが歌ベッドの上に乗せ読みいる腸をめぐって臍から出たのか
頭からするりと出たのかしっとり考えた歌なのかすべりがよい
若いころ喧嘩もしたねパリホテルの前で突然別々行動
紫色の朝顔が毎朝顔を出す私を慰めてくれる子供のわざ

長い夏 本田洋子

ブランコに子供に返り乗ってみたシオカラトンボすうと横切り
酷暑の夏日照りに弱き吾のこと部屋中ブルーに染めて息せり
一日中蝉取りし夜うなされて家族みんなの顔が覗いた
今日一日急に気温は下がれども夏の尾をまだ引きずっている
行く先に困難が横たはるこの夏の絶望慰さむひまわりの花
孫と娘この一日違いの誕生日忙しきかな祝いの行事

静かさや蝉ははや命尽きたか八月末の猛暑の午後に
長かりし酷暑が置いて行きしもの熱中症と百日草と
朝焼けや小窓を染めて木々を染め真白き雲をピンクに染めて
あの人に彼は絶対必要なら勝てなかったの私の愛は
涼風が吹いて来るのを待っている誰も誰もが秋風を待つ
スーパ―に宮崎みかん積み上がる「早稲」とあるので買いて帰らむ
赤ランプあの日の朝に消えにけり気温下がりて緑のランプに
この夏はすっかり元気無くせども生きねばならぬあの娘この為に

雨音

午前二時またも眼覚めし悪しき癖仕方なく原稿に向かふ
朝まだきコーヒー、トマトの朝食をとれば始まる吾の一日
止みし雨サーと一降り夜よの静寂しじま秋虫たちがかすかに鳴きぬ

お彼岸を過ぎても薫らぬ金木犀アパートの木も公園の木も

神無月夜明けがめつきり遅くなり短かき秋を寂しく思ふ

十五夜のオレンジの月大きくてその美しさ胸が震えし

神無月久かた振りの雨音に心地よき眠り目覚めさせらむ

右腕にインフルエンザ左から採血をせり忙しきからだ

夕闇に空見上ぐれば半月に寄りそうような木星の光

歯科、眼科、内科、整形エトセトラ毎日のよう通う吾が身は

初みかん漸く会えし秋の味喰めば季節の甘酢っぱさや

急のこと霜月思う冷えが来て衣替えせよと焦らされき

七度目のコロナワクチン受けにけりこのままずっと続くのかしら

ミツチリと頭を垂れし稲穂かな夕陽を浴びて黄金色に

一年生走って転んだ運動会それでもゴールは三等賞に

金木犀庭の大木咲きにけりドアを開ければ香のシャワー

インド紀行 丸山光

子供らの突然ごちやごちや集まりてインドへ行く日駅に送らる
華やかな旅行鞆にはやりがありて軽い焦りの親父のカバン

乗り継ぎのクアランプールのターミナル一人でお茶の軽い冒険

入管の進まぬ列はスーパ―の実習生のごと長き列

マドラスはチェンマイと名を変えてインドの大地がわれを迎える

インドでは徘徊するは牛のこと哀しきことば徘徊老人

唯一の有り余るものは子供ですサリ―の婦人は明るく話す

合言葉は下を向いて歩こうと牛のあふれるインドを歩く

ニューアミスを繰りかえして行くチェンマイの喧騒の中不思議と慣れる

何だろ　う何か足りない醤油だね　インド食べる中国料理

一月のバンガロールは初夏のごと裸足の子らの瞳かがやく

高原のバンガロールの一月は初夏の輝き風は爽やか

窓叩き小銭乞いたるたる老人の瞳の中に悠久インド

インドにはやはりいました蛇つかい蛇と二人で客を値踏みす

道端に占い師いて近づけば客とと二人で似たりと笑う

交渉で値段の違うリキ車乗る得したような損したような

寒村のインドの便器はかわいくてちよと心配位置たしかめる

爆竹と花が巻かれて村までを踊りの列に導かれ行く

火が炊かれ歓迎式は闇の中激しい踊りが月に照らさる

岩肌のインドの大地を乞食が牧者のごとき棒を持ちて行く

宿泊の場所には答えず気をつけて蚊に気をつけてと念を押される

満月の光の下にベット出しインドの村で一夜を過ごす

滋養ある卵のごとき太陽が地平線上ゆらゆら揺れる

いつまでも沈まぬごとき威厳もちインドの大地に夕日が沈む

道端にバスのエンジンばらされて修理のために子どもがもぐる

靴はく子裸足の子らが混じり合い村の力で比率が決まる

ゆすぶればまだまだ入る十億の人を飲み込むインドの大地

こぼれ落つ大きな瞳も制服の一部かと思うインドの児童

お好みの回転寿司を待つごとく旅行鞆が回ってこない